

みそらの星

5月2日は、弟、光夫の命日である。今から67年も前の戦後まもないその日、二番目の弟光夫は、誕生から3か月を迎えることもなく、天に召されてしまった。弟は生まれたときから、か弱く、泣き声も小さく、痩せこけている赤ん坊だったかもしれない。赤ちゃんに触ったりすることも許されていなかったような気がする。光夫が死んだのは「栄養失調」と言われた。戦中戦後、母は食糧難のため、栄養を取れず、痩せていた。光夫もそのため、虚弱に生まれだし、生まれた後も、十分な栄養も医療も与えられない状態だった。弟の死は「戦死」と思っている。戦争の犠牲者である。

その日、私はもうすぐ5歳になろうとしていたのに、変な記憶が一つあるだけである。弟が死んだということを聞いた。私は、死という言葉、また、その意味はとても理解できることではなかった。父も母も部屋の戸を閉ざしてしまった。その部屋は悲しみの気配が強く、私とすぐ下の弟は、部屋に入っていく勇気がなかった。放りっぱなしにされていた私と弟は階段の中ほどに座って、両親が声をかけてくれるのをただ待っていた。

弟と静かに仲良く階段に座って待っていると、父が出てきて、私に「子豚のお人形を光夫にあげなさい」と言った。その人形は小さいものだったけれども、私の唯一の人形だった。自分の人形を失うということは私には一大事であった。けれども父の命令は絶対で、人形を持って部屋に入って行き、眠りについた光夫の横に子豚の人形を寝かせてあげた。弟が死んだことの意味も分からず、むしろ、お人形を手放すことが残念だったような思いを、今も覚えていて、光夫に申し訳ない気持ちで一杯である。本当に幼い姉であった。

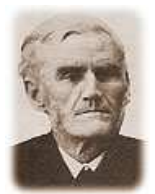
戦後間もなくで、写真を撮るという余裕もなく、父が光夫の面影を画用紙に鉛筆で描いた。痩せ衰えているが、静かな顔である。すぐ下の弟とそっくりに見える。どんなに生きていてほしかったことか。光夫を思い出すとき、いつも耳に響く讃美歌がある。光夫の讃美歌と私は決めてきた。光夫の葬儀、記念会にいつも歌ってきたからである。



光夫

再び主イエスの くだります日 召さるる ^{おさなご} 幼児 み国にて
み空の星と 輝きつつ ^{みかむり} 主の御冠の ^{たま} 珠玉とならん

讃美歌 458



W. O. Cushing

この讃美歌の作詞家は19世紀のアメリカの牧師、W. O. Cushing氏である。妻を亡くし、自分自身も体が弱かったので、早くに退職し、讃美歌をたくさん書かれた。彼は子ども好きだったようだ。彼は、日曜学校に集まってくる子どもたちを jewels として、宝のように大切に愛でる主イエスを賛美しているのだが、原詩の、gather という言葉を、日本語訳では「召さるる」としてあるので、私はその言葉を「神のお召し」call の意味に受け止めた。そして、光夫は神様のもとで、星のように輝いているのだと自分を納得させてきた。

“Mr. Cushing was a most noble, sweet spirited Christian gentleman.” (Christian Biography Resources) との評を見つけた。光夫も無垢のまま召されたのだから、気高く、優しく、主を信じる人であろうと信じている。(2014. 5. 2)